ふえき

時代を超えて変わらないもの

特集

岡山108の アクティビスト図鑑

84

公益財団法人 福武教育文化振興財団 機関誌「不易」

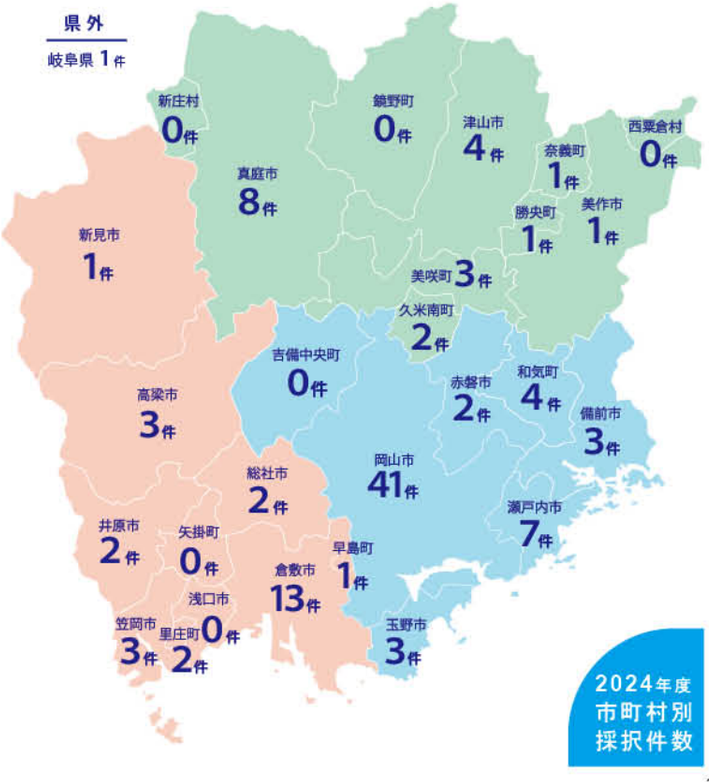
2024年度
教育文化活動助成　特集

岡山アクティビスト108の図鑑

2024年「教育文化活動助成」の対象者は108件、助成総額は2998万円に決定しました。採択率は39・7%、平均助成額は28万円です。

今年度の応募件数は2722件。昨年の229件と比べ43件増えました。新規申請数も34件増え272件中134件でした。新型コロナウイルスの感染が落ち着き、踏み出せずにいた一歩を踏み出したアクティビストが増えたのでしょうか。

今年度も充実したフォローアップ（助成金以外の支援）に取り組み、みなさまの活動の成長・発展の一助となるよう応援いたします。



備前エリア BIZEN AREA activist

岡山市

1 「たけべよいとこ」盆踊り保存会

建部町活性化のための「たけべよいとこ」盆踊りの再生と継承

垣本 広司

2 池田動物園奉還町商店街連携委員会

奉還町商店街&池田動物園コラボ！お店を巡る動物発見ラリー

坂口 幸亮

3 牛窓話茶会えいとう市実行委員会

対話・アートによる「生きた歴史館（仮）」の開催と出前

武本 賢治

4 岡山経済新聞団

「書く人」を応援する講座

松原 龍之

5 岡山多胎サークル おてて

多胎の広場

里見 沙恵美

6 占領期岡山フォーラム（旧地域分析研究会）

占領期岡山に関する記録の保存・活用のためのアーカイヴの構築

徳澤 啓一

7 Tamano Beads

玉野発！あなたのわたしのプロジェクト（TamanoBeads 2024）

森本 直樹

8 The World Kitchen 実行委員会

The World Kitchen ～多様性の輪を岡山に～

岡田 栞那

9 特定非営利活動法人メンターネット

外国人向け教育支援、多文化共生のためのコミュニティの創出

山下 裕司

10 和太鼓・チームみなみっ子

和太鼓で御津の町に笑顔と元気をとどけ隊！

岩井 博行

岡山市

1 「たけべよいとこ」盆踊り保存会
2 池田動物園奉還町商店街連携委員会
3 牛窓話茶会えいとう市実行委員会
4 岡山経済新聞団
5 岡山多胎サークル おてて
6 占領期岡山フォーラム（旧地域分析研究会）
7 Tamano Beads
8 The World Kitchen 実行委員会
9 特定非営利活動法人メンターネット
10 和太鼓・チームみなみっ子
11 一般社団法人たわわの里プロジェクト
12 NPO法人企画on岡山
13 岡山大学「子どもと音楽」研究チーム
14 NPO法人みんなの劇場・おかやま
15 特定非営利活動法人岡山市子どもセンター
16 カラフルキッズの会にじのね
17 子どもすくすく育成プロジェクト
18 高梁野鳥の会
19 福谷農家博物館
20 専門学校ビーマックス　造山古墳チーム
21 岡山多読クラブ
22 特定非営利活動法人音楽の砦
23 一般社団法人SGSG
24 一般社団法人ぐるーん
25 ノートルダム清心女子大学ソーシャルデザイン研究会
26 めぐる・つながるユース活動キャラバン実行委員会
27 岡山県立岡山御津高等学校　御津地域活性化プロジェクト
28 一般社団法人シネマフィルム
29 U-mammy's
30 岡山県演奏家協会
31 文化遺産継承プロジェクト
32 岡山フルートの会
33 都山流岡山県支部
34 岡山県現代舞踊連盟
35 岡山県高等学校演劇協議会
36 演劇ユニット雛雲
37 特定非営利活動法人 映像作家支援機構
38 小さい劇作家フェス実行委員会
39 一般社団法人 歴史新大陸
40 劇団夢幻月
41 岡山映画祭実行委員会

玉野市

42 玉野高等学校　エリア探究チーム
43 岡山県立玉野光南高等学校 ぷろぐ☆ラボこうなん
44 ユナイテッド・ミュージカル・カンパニー

備前市

45 頭島あかりまつり実行委員
46 NPO法人備前プレーパークの会
47 備前市合併20周年記念「第九」演奏会実行委員会

瀬戸内市

48 社会福祉法人藤花会　SETOUCHI Well Being
49 ushimado.labo
50 音楽あいうえお
51 邑久高等学校セトリー運営指導委員会
52 ひとづくり・まちづくりフォーラム実行委員会
53 備前福岡の市圏地産地消推進協議会
54 糸あやつり人形劇団「つきみ草」

赤磐市

55 非営利活動法人赤磐の漆を守る会
56 一般社団法人 螢學舎

和気町

57 旧和気小学校みんなで放課後合宿実行委員会
58 東備対話プロジェクト
59 「ひと・もの・こと」とつながる佐伯小夢プロジェクト
60 岡山県和太鼓連盟

備前エリア

岡山市

11 一般社団法人たわわの里プロジェクト

学校よりも起業を選んだ小学生とその母親を囲むゴミ拾いイベント

高野 暢子

岡山市

16 カラフルキッズの会にじのね

たのしいおんがくフェス

田中 朋子

岡山市

21 岡山多読クラブ

日本語学習者のための日本語多読クラブの開催

太田 朗子

岡山市

12 NPO法人企画on岡山

高齢者と障害者と子どもたちが一緒になって創る新たな舞台

大塲 真護

岡山市

17 子どもすくすく育成プロジェクト

子ども食堂などに出向いて子ども達の居場所づくりを行う

石原 訓志

岡山市

22 特定非営利活動法人音楽の砦

未来を担う子どもの健康のための第1回子どもの声を聴きまショー

松原 徹

岡山市

13 岡山大学「子どもと音楽」研究チーム

地域とグローバルをつなぐ「おかやま国際和楽器学生フェスティバル」

早川 倫子

岡山市

18 高梁野鳥の会

高梁市の鳥ヤマセミを指名手配！知名度UPから次世代の環境教育へ

黒田 聖子

岡山市

23 一般社団法人SGSG

学校の枠を超えた高校生探究活動サポートデスク

野村 泰介

岡山市

14 NPO法人みんなの劇場・おかやま

レトロあそび復活大作戦！20th Anniv.

髙谷 純

岡山市

19 福谷農家博物館

昔の農具を使った農業体験の手助けとなる動画配信

城木 武士

岡山市

24 一般社団法人ぐるーん

高校生居場所カフェみつカフェ。

河本 美津子

岡山市

15 特定非営利活動法人岡山市子どもセンター

学びの文化の循環を起こす学童保育への舞台公演アウトリーチ事業

杉本 克敬

岡山市

20 専門学校ビーマックス造山古墳チーム

地元の誇り「造山古墳」を眺望する〝気球搭乗体験〟

中塚 舜翔

岡山市

25 ノートルダム清心女子大学ソーシャルデザイン研究会

大学生と留学生の異文化チームによる犬島の社会問題解決と活性化

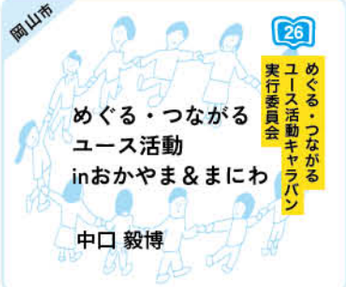
C. J. Creighton

岡山市

26 めぐる・つながるユース活動キャラバン実行委員会

めぐる・つながる
ユース活動
inおかやま＆まにわ

中口 毅博



岡山市

31 文化遺産継承プロジェクト

文化財の調査研究や所有者支援により未来へ継承するプロジェクト

横山 定

岡山市

36 演劇ユニット雛雲

岡山で怪談劇を上演し怪談と岡山弁の魅力を伝える

小松原 千晶

岡山市

27 岡山県立岡山御津高等学校御津地域活性化プロジェクト

岡山御津高等学校地域活性化のためのミライの学びプロジェクト

末廣 聡

岡山市

32 岡山フルートの会

チャレンジする子供たちのための岡山学生フルート・コンクール

岩﨑 範夫

岡山市

37 特定非営利活動法人映像作家支援機構

シネマジャンク3

大西 貴也

岡山市

28 一般社団法人シネマフィルム

シネマフェスティバル2024

山本 達己

岡山市

33 都山流岡山県支部

尺八文化の普及・邦楽人口の拡大推進プロジェクト

佐藤 秧山

岡山市

38 小さい劇作家フェス実行委員会

「小さい劇作家フェス」の開催と見巧者の研究

スミカオリ

岡山市

29 U-mammy's

U-mammy's コンサートvol.2

近藤典子

畑山かおり

岡山市

34 岡山県現代舞踊連盟

Dance Performance 2024
浦人ーうらびと

間野 和美

岡山市

39 一般社団法人歴史新大陸

演劇「ラストサムライ瀧善三郎のBUSHIDO」

後藤 勝徳

岡山市

30 岡山県演奏家協会

「Hommage（オマージュ）愛をこめて～敬愛～」コンサート

佐々木 英代

岡山市

35 岡山県高等学校演劇協議会

高校生の創造性を育む「実験劇場」

上野 修嗣

岡山市

40 劇団夢幻月

令和6年度天神山文化プラザ土曜劇場『チャッポのきになる花』

河上 朋子

備前エリア

岡山市
41 岡山映画祭実行委員会
「分断を超えて」岡山映画祭2024
赤松 章子

備前市
46 NPO法人 備前プレーパークの会
(続)みんなでつくろう!繋がろう!「みんなのおうち」
北口 ひろみ

瀬戸内市
51 邑久高等学校セトリー運営指導委員会
瀬戸内市と連携して地域のリーダーを育成する探究活動
竹原 伸之

玉野市
42 玉野高等学校 エリア探究チーム
玉高版ブラタマノで玉野の良さを発見し、「たまののおと」で発信
藤原 修

備前市
47 備前市合併20周年記念「第九」演奏会実行委員会
備前市合併20周年記念「第九」演奏会
杉浦 俊太郎

瀬戸内市
52 ひとづくり・まちづくりフォーラム実行委員会
旅するひとづくり・まちづくりフォーラム2024
田甫 健一

玉野市
43 岡山県立玉野光南高等学校 ぷろぐ☆ラボこうなん
高校生ICTレストラン「ぷろぐ☆ラボこうなん」
一守 克己

瀬戸内市
社会福祉法人藤花会 SETOUCHI Well Being
48
瀬戸内市の伝統文化『糸操り人形劇』継承と福祉教育
吉川 大輔

瀬戸内市
53 備前福岡の市園地産地消推進協議会
端緒についた瀬戸内市の食育学習を持続化するための応援団になる
大倉 秀千代

玉野市
44 ユナイテッド・ミュージカル・カンパニー
プロと有志合唱による「グレイテストミュージカルコンサート」
四宮 貴久

瀬戸内市
ushimado.labo
49
旧坪井邸改修工事を通じた空き家再生プロセスの構築スタディ
片岡八重子

瀬戸内市
54 糸あやつり人形劇団「つきみ草」
「泣いた赤鬼」の新たな制作から上演を通して糸操り人形劇の普及
妹尾 薫

備前市
45 頭島あかりまつり実行委員
頭島あかりまつりを多世代参加可能にするためのプロジェクト
片倉 弘貴

瀬戸内市
50 音楽あいうえお
0歳からのわくわくクラシックコンサート
木口 雄人
森野 美咲
内山 詠美子

赤磐市
55 非営利活動法人 赤磐の漆を守る会
荒廃地への漆の木を植栽して、環境美化に努める
坪井 恒久

①地域社会(コミュニティ)の活性化に取り組む活動

赤磐市
56 一般社団法人 螢學舎
記憶と記録を未来につなぐ「紙」づくりから はじめる製本・装丁
大槻 順一郎

②次世代育成に取り組む活動

和気町
57 旧和気小学校みんなで放課後合宿実行委員会
旧和気小学校 みんなで放課後合宿
畠中 要輔

和気町
58 東備対話プロジェクト
小中高生と地域との対話を通し、地域を担う人材を育成
赤松 一樹

③教育の質の向上や普及に取り組む活動

和気町
59 「ひと・もの・こと」とつながる佐伯小夢プロジェクト
児童と地域を結ぶ新しいカタチの体験活動
山本 和宏

④文化芸術の質の向上や普及に取り組む活動

和気町
60 岡山県和太鼓連盟
岡山県和太鼓連盟30周年記念 ～晴れの国和太鼓まつり～
塩尻 司

審査委員からのエール

描いた構想に、ぜひ伸び伸びと取り組んでください。仲間の輪が広がる活動に期待しています！

予算の関係で、不採択もありますが、どれが採択になってもいいほど全体のクオリティがあがっていました！

アイデアと熱意にあふれる企画の数々に、わくわくします。岡山を大いに盛り上げてください。

自立の気構えを持ち地道に積み重ねを継続しているプロジェクトが評価されています。ぜひ自信をもって活動を！

皆さんの活動を通して、どのような人づくり地域づくりの輪が広がっていくのか、楽しみにしております。

もはや、いい事業だなと思うだけでは採択が難しくなってきました。事業の解像度を高めることがポイントです！

どの取り組みからも、その眼差しの先にある未来へ向かう、日頃からの果敢な挑戦と熱意が伝わってきました。

備中エリア

BIZCHU AREA activist

倉敷市
- 61 特定非営利活動法人ぶどうの家わたぼうし
- 62 川辺復興プロジェクトあるく
- 63 一般社団法人はれとこ
- 64 Kojima Kids Art :)
- 65 桃源有志の会
- 66 エディブル・エデュケーション岡山研究会
- 67 真備町復興支援　夢叶う幸せの黄色い丸型ポストを実現する会
- 68 一般社団法人コノヒトカン
- 69 特定非営利活動法人こうのさと
- 70 岡山県立倉敷古城池高等学校ワッショイ！とーかーず
- 71 清心中学校・清心女子高等学校・倉敷青年会議所 理界村実行委員会
- 72 清心・自然体験教室
- 73 倉敷少年少女合唱団

高梁市
- 74 有漢学園学校運営協議会
- 75 「高梁未来学」推進委員会
- 76 高梁100challenge

新見市
- 77 神代和紙保存会

笠岡市
- 78 神島お遍路トレイルマラニック実行委員会
- 79 白石踊会
- 80 田賀屋狂言会

総社市
- 81 玉島ARTプロジェクト（たまプロ）
- 82 昭和五つ星学園義務教育学校と地域が交わる「夢広場」をそだてる会

井原市
- 83 備中志事人
- 84 三原渡り拍子保存会

早島町
- 85 ぬかつくるとこ

里庄町
- 86 大原焼プロジェクト
- 87 飛島ガーディアングループ

倉敷市

61 特定非営利活動法人ぶどうの家わたぼうし
逃げ遅れゼロのまちを目指した「演劇」ワークショップ
津田 由起子

倉敷市

63 一般社団法人はれとこ
市民ライター育成講座「高梁川流域ライター塾2024最終回」
戸井 健吾

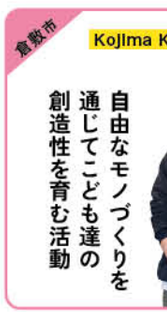
倉敷市

68 一般社団法人コノヒトカン
音声配信でコノヒトカン1000缶プロジェクトの活動を発信！
三好 千尋

倉敷市

62 川辺復興プロジェクトあるく
大切な人と共有したい防災・減災の取り組み
槙原 聡美

倉敷市



Kojima Kids Art :)
64
自由なモノづくりを通じてこども達の創造性を育む活動
稲葉 剛

倉敷市

69 特定非営利活動法人こうのさと
ASO-VIVAプロジェクト、スコレーパーク森の舞台建設と完成披露会
片岡 徹也

倉敷市

65 桃源有志の会
秋祭りの和太鼓運搬台車の作製及び灯ろうの作製
笠原 阿津士

倉敷市

66 エディブル・エデュケーション岡山研究会
ガーデンにダイブしよう☆EDIBLE LIFE Lab.
田辺 綾子

倉敷市

67 真備町復興支援 夢叶う幸せの黄色い丸型ポスト実現プロジェクト
石井 駒治郎

倉敷市

70 岡山県立倉敷古城池高等学校ワッショイ！とーかーず
水島コンビナートクルーズ＆バスツアーで地域の活性化を
田邉 茉悠

倉敷市

71 清心中学校・清心女子高等学校・倉敷青年会議所 理界村実行委員会
生きる力楽習カレッジ『理界村』2024
山田 直史

倉敷市

72 清心・自然体験教室
自然との共存を目指して、フィールド系女子を育成する
黒田 聖子

倉敷市

73 倉敷少年少女合唱団
創立50周年記念定期演奏会で作曲家・鈴木輝昭氏へ新曲委嘱
難波 夕鼓

高梁市

74 有漢学園学校運営協議会
有漢学園開校後10年に向けた学園・地域の魅力向上プロジェクト
湯浅 末子

高梁市

75 「高梁未来学」推進委員会
「高梁未来学」を核としたキャリア教育の充実
小野 雅子

高梁市

76 高梁100challenge
備中高梁会議＆高梁100challeng伴走プロジェクト
横山 弘毅

新見市

77 神代和紙保存会
神代和紙の保存伝承・参加型プロジェクト
仲田 紗らさ

笠岡市

78 神島お遍路トレイルマラニック実行委員会
第3回神島お遍路トレイルマラニック大会
守屋 百合子

笠岡市

79 白石踊会
高校生のアイデアを活かす白石踊の継承活動
河田 裕善

笠岡市

80 田賀屋狂言会
小学校等における古典芸能学習支援事業
田賀屋 夙生

総社市

81 玉島ART プロジェクト（たまプロ）
タマトーク！ー犬も歩けば玉島中央町ー
黒川 しのぶ

総社市

82 昭和五つ星学園義務教育学校と地域が交わる「夢広場」をそだてる会
昭和五つ星学園義務教育学校と地域が交わる「夢広場」をそだてる
ウラ太郎

井原市

83 備中志事人
地域の学び・志事の創出を支える担い手（伴走者）育成
藤井 剛

井原市

84 三原渡り拍子保存会
若い人に渡り拍子を習得してもらうため、教習用DVDを作製する。
田邉 晶則

美作エリア activist

MIMASAKA AREA activist

津山市
88 美作大学 沖縄県人会
89 広野子ども歌舞伎教室
90 美作サイエンスフェア実行委員会
91 Nishiima25

真庭市
92 子どもの未来を応援する会
93 霜月祭実行委員会
94 ピクトリィシアター
95 特定非営利活動法人 勝山・町並み委員会
96 NPO法人manabo-de
97 真庭学習会
98 蒜山ミライ会議
99 (一社) 勧進プロジェクト

美作市
100 Palette Scene

勝央町
101 勝央図書館 絵本「勝央の金時」制作事務局

奈義町
102 GifTree

久米南町
103 コンシーデレ山手

美咲町
104 弓削フリースペース
105 岸田吟香を語り継ぐ会
106 「月の輪の心を語り継ぐ会」
107 作州絣保存会

88 美作大学 沖縄県人会

創作劇　時をこえ

89 広野子ども歌舞伎教室

津山市

地域に根差し
継続的活動をする
広野子ども歌舞伎教室

柿内 穂

90 美作サイエンスフェア実行委員会

津山市

美作
サイエンスフェア

南 洋明

91 Nishiima25

津山市

櫻井 由子

地域資源、
明治期の大蔵を
活用した
「アニマルパラダイス」

92 子どもの未来を応援する会

真庭市

子どもの成長を支援する
公園をみんなで作る

藤本 陽子

93 霜月祭実行委員会

真庭市

地域の伝統文化を後世へ。
持続可能な活動のための
仕組みづくり

入江 正親

94 ピクトリィシアター

真庭市

聴いて楽しむ特別企画
「映画を聴こう！」

柴田 祥子

95 特定非営利活動法人 勝山・町並み委員会

真庭市

「土蔵コンサートに出演してみよう」オーディションとコンサート

瀧﨑 昌恵

96 NPO法人manabo-de

真庭市

教育サードプレイス
「manaスタ」

森年 雅子

97 真庭学習会

真庭市

高校生による
「つながる、学ぶ、成長する」
学習会

竹井 慎

98 蒜山ミライ会議

真庭市

共に語ろう。
共に変わろう。
私たちのミライのために。

永田 浩史

99 (一社) 勧進プロジェクト

真庭市

【講演会】
「文化財の活用と維持」
～遺していくための
伝統技術～

芥川 英祐

100 Palette Scene

美作市

アート・文化を
身近に感じてもらう
取り組み

佐古 美香

101 勝央図書館 絵本「勝央の金時」制作事務局

勝央町

絵本「勝央の金時」制作

佐古 美和

102 GifTree

奈義町

井本 亜希

サイエンス＆
テクノロジー
×
多文化交流
×
クッキング～

103 コンシーデレ山手

久米南町

山手地区の「屋号」を
掘り起こせプロジェクト

山本 祐一

104 弓削フリースペース

久米南町

中高生の居場所づくり

明楽 香織

105 岸田吟香を語り継ぐ会

美咲町

郷土の偉人「岸田吟香」の
業績を全国に発信する
活動

草地 浩典

106 「月の輪の心を語り継ぐ会」

美咲町

月の輪の心を語り継ぎ、
次世代に継承し
地域振興に
資する活動

山田 雄二

107 作州絣保存会

美咲町

改修工芸館をフル活用して
新たな気持ちで再出発

日名川 茂美

108 「笑い」でつながる狂言ワークショップ実行委員会

岐阜県

狂言をプラットフォームとした
外国人住民とつながる
地域づくり

松尾 憲暁

activist 県外エリア

岐阜県　108
「笑い」でつながる
狂言ワークショップ
実行委員会

①地域社会（コミュニティ）の活性化に取り組む活動

②次世代育成に取り組む活動

③教育の質の向上や普及に取り組む活動

④文化芸術の質の向上や普及に取り組む活動

福武教育文化振興財団フォーラム　ここに生きる、ここで創る —vol.10

「人づくり、地域づくりの原点回帰」講演レポート

芸術や文化 災害を乗り越える力にも

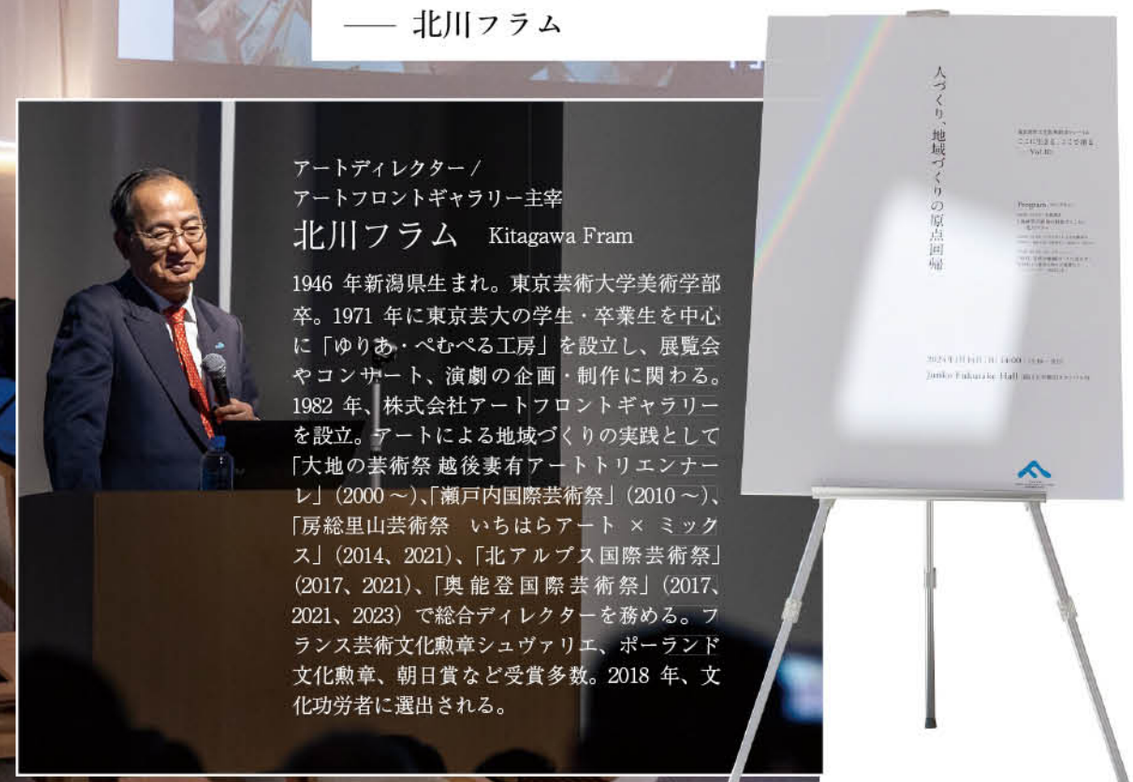
取材・文／黒部麻子

今年2024年は、つらい幕開けとなりました。元日に起きた能登半島地震による被害は甚大で、山崩れや道路の寸断によって集落の孤立は長期化していました。さらに追い打ちをかけるように、「限界集落の復興に税金を使うのか」「復興より移住」といったSNS等での言説が、被害状況すら明らかになっていない中で飛び交い始め、胸がつぶれそうでした。

そんな中、1月14日のフォーラムでは、北川フラムさんが講演されました。フラムさんは、アートによる地域づくりの実践として各地で地域型芸術祭を手がけ、2000年から「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」、2010年から「瀬戸内国際芸術祭」、そして2017年から「奥能登国際芸術祭」で総合ディレクターを務めてこられた方です。

この日のお話は、地域型芸術祭が、災害をはじめとする大きな困難を、私たちが乗り越えていくための力にもなることを感じさせてくれるものでした。

基調講演
「地域型芸術祭の目指すところ」
—— 北川フラム



アートディレクター／
アートフロントギャラリー主宰
北川フラム　Kitagawa Fram

1946 年新潟県生まれ。東京芸術大学美術学部卒。1971 年に東京芸大の学生・卒業生を中心に「ゆりあ・ぺむぺる工房」を設立し、展覧会やコンサート、演劇の企画・制作に関わる。1982 年、株式会社アートフロントギャラリーを設立。アートによる地域づくりの実践として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（2000～）、「瀬戸内国際芸術祭」（2010～）、「房総里山芸術祭　いちはらアート × ミックス」（2014、2021）、「北アルプス国際芸術祭」（2017、2021）、「奥能登国際芸術祭」（2017、2021、2023）で総合ディレクターを務める。フランス芸術文化勲章シュヴァリエ、ポーランド文化勲章、朝日賞など受賞多数。2018 年、文化功労者に選出される。

震災と芸術祭

「解体作業に慣れていることもあるし、アーティストは時間の流れがゆるやかで、人の話を聞いて一緒に作業をするのが大好きな人たちです。芸術祭は、震災から学ぶ、鍛えられるということが相当ありました」

講演冒頭、フラムさんはこう切り出しました。2004年に起きた中越地震でも、また2011年の東日本大震災でも、芸術祭関係者たちは復興支援に尽力したそうです。特に大地の芸術祭には、スタートアップ企業の若手経営者が熱心に関わっているそうで、そうした人たちが今、能登にも現地入りして、浄水設備や移動スーパーなどの提供をしているとのことでした。

地震によって地盤の一部が沈んでしまったスズ・シアター・ミュージアム（珠洲市）をはじめ、現地の痛々しい被災の様子をスクリーンに映しながら、フラムさんはこう話します。

「昨年開催された奥能登国際芸術祭には、のべ5万人以上の来場者がありました。5万人以上の人が現地を歩き、そして現地のおじいちゃま、おばあちゃま、サポーターたちと話をした。スマホやパソコンでは得られない、もっと本質的で、肉体的な関わりです。それは、大きなリアリティーとなります。自分にとってリアリティーのある場所が増えるということは、とても重要なことです」

かつて哲学者・鶴見俊輔さんが語ったように、人は、よく知っている人のいる国とは戦争しようと思わないだろう、戦争にしても災害にしても、「遠くの誰か」を思う上で、リアリティーのある場所が増えることが大切で、芸術祭がそこに大きく寄与しているのだとフラムさんは話します。

YouTube
講演の動画はこちらからご覧ください。

豊島・大島と瀬戸内国際芸術祭

瀬戸内国際芸術祭（瀬戸芸）には、私も何度も行きましたが、この日は、舞台裏のお話をたくさん聞くことができました。

瀬戸芸の軸は豊島と大島だと、フラムさんは言います。かつて産廃の不法投棄が大問題となった豊島と、国の誤った隔離政策によってハンセン病患者を収容した療養所を擁する大島です。「豊島と大島をちゃんとやらなければ瀬戸芸をやる意味はないと思った」と振り返ります。

豊島と聞いて思い浮かべるのは、今や産廃よりも豊島美術館だという人も多いのではないでしょうか。棚田に囲まれ、空に向かって開口した、白く静かな空間の豊島美術館。内部では、いたるところから水滴が湧き出て走り出す、不思議な場所です。柱がどこにも使われていないこの美術館は、コンクリートの撥水技術も含め、「建築労働者の勝利です」とフラムさん。

大島では、国立ハンセン病療養所大島青松園を訪れ、フラムさんは驚いたそうです。

「居住棟がみんな灰色っぽいことに愕然としました。この画一的な居住棟を見て、建築家は何をやってるんだと思ったんです」

そうした目で、色彩豊かな大島のアート（田島征三さんによる「Nさんの人生・大島七十年」や、「つながりの家カフェ・シヨル」など）を振り返ると、思いがまた一段と深まります。

「僕は観光っていうのは、実はあんまり信用していないんです。地域の人たちのなりわいがしっかりしていくものでなければ底が浅い。地域型芸術祭は外国にはほとんどなく、日本独自のものになってきていますが、地に足をつけ、地域に根差すこと、土地そのものを明らかにすること、そしていろんなお客さんがその土地と親しくなるということ。それが厳しい時代の中で、芸術祭のもつ意味なのではないでしょうか」

トークセッション
「教育・文化を地域づくりに活かす」

YouTube
トークセッションの動画は
こちらからご覧ください

小さな積み重ねを大事に

第2部トークセッションでは、フラムさんのお話の、まさに実践面を担う活動をされている方々が登壇しました。

瀬戸内こえびネットワーク事務局長の甘利彩子さんは、瀬戸芸のサポーター「こえび隊」の事務局を担っています。芸術祭は、開催期間の100日よりも、準備期間の1000日の方が重要だとフラムさんも言われていましたが、甘利さんもこの1000日で、どう島の方々と関係をつくって協働していくかを大事にしているとのことでした。印象的だったのが、空き家の掃除の話です。「築100年くらいの家を掃除するのって、精神的にも本当に大変なんです。暮らしの跡が随所に残っているから。でも、親族の方と一緒に掃除する中で、昔おばあちゃんはこんな仕事をしていたんです、といったお話を聞ける。そういう小さな積み重ねを大事にしています」と甘利さん。

甘利彩子 Amari Ayako　NPO法人瀬戸内こえびネットワーク事務局長　長野県長野市生まれ。2004年香川県高松市に移住。2009年、瀬戸内国際芸術祭サポーター「こえび隊」立ち上げ、事務局の運営を始める。2012年、NPO法人瀬戸内こえびネットワーク発足。こえび隊事務局をはじめ、島々との交流や瀬戸内国際芸術祭における食やパフォーミングアーツ、ツアー、継続プロジェクト等の企画・運営を行う。またまた大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレなど全国各地の地域型芸術祭の運営に携わる。

トークセッションの進行役を務めた、ノートルダム清心女子大学准教授の成清仁士さんは最後に、ご自身が15年前に福武教育文化振興財団の文化活動助成を受けた時のことを振り返りながら、こう締めくくりました。

「皆さんの活動のお話を聞いていると、やはり間をつなぐ人や、やりたい気持ちを後押ししてくれる人ってとても大事ですよね。僕も15年前に財団の方に声をかけてもらったことがきっかけで、倉敷で地域活動を始めました。若い人が一歩前に進むきっかけを、ぜひご来場の皆さんにつくってほしい」

成清仁士 Nariky o Hitoshi　ノートルダム清心女子大学人間生活学科准教授　岡山県岡山市生まれ。総社高卒。広島大学・大学院で建築史・意匠学を学ぶ。鳥取市中心市街地活性化協議会タウンマネージャー、鳥取大学地域価値創造研究教育機構准教授などを経て、2020年より現職。2012年よりNPO法人倉敷町家トラスト理事。博士（工学）。2023年ゼミの地域連携活動の成果としてくらしきづくりまっぷ」作成。倉敷の未来ビジョン策定を目指す取り組みにも立ち上げから参画。倉敷在住。

今年の秋には、岡山県北部で「森の芸術祭」が開催されます。このフォーラムを聞けたことで、これからの芸術祭をより深く味わうことができそうです。来た時よりも、なんだか足取りが軽くなったことを感じながら、会場を後にしました。

福井大和 Fukui Yamato　特定非営利活動法人男木島生活研究所代表　香川県高松市男木島生まれ。中学卒業後、島を離れていたが、「瀬戸内国際芸術祭2013」をきっかけに、18年ぶりに家族で男木島へUターンを決意。休校していた男木小中学校の再開活動に取り組み、Uターン後は保育園の再開など島で子育て出来る環境を整え移住・定住を支援。男木島での暮らしのアップデートをしながら地域のボランティア活動も積極的に行い、地域住民と接しながら様々な取り組みを行っている。

男木島生活研究所の福井大和さんは、瀬戸芸がきっかけで2013年に男木島へ家族でUターン。もともと60歳くらいで帰ろうと思っていたそうですが、その頃には島が消滅してしまうのではと危機感をもち、人生の針を20年ほど早めたそうです。男木島では、2014年に小中学校が再開され、移住者が大きく増えました。福井さんは言います。

「学校再開や、男木島図書館のリノベーションなどにより、教育や文化に関心のある移住者が増えています。瀬戸芸が盛り上がったからといって、ここで急に観光地っぽいことをしようとしても失敗する。訪れる人も多分それは求めてない。島の暮らしに根付いたものを大事にしたいです」

江森真矢子 Emori Mayako　一般社団法人まなびと代表理事　東京生まれ。国際基督教大学卒。教育関連企業で私立学校の広報、学習プログラムの企画・運営等を通した魅力づくり支援に携わった後、リクルートに転じ教育専門誌「キャリアガイダンス」シリーズの編集者に。その後、2015年から岡山県で地域おこし協力隊として高校魅力化事業に従事する傍ら、フリーランスの編集者・ライターとして活動。2019年一般社団法人まなびとを立ち上げ、百姓的生き方働き方を実践中。

まなびと代表理事の江森真矢子さんは、2015年に東京から移住し、和気閑谷高校で高校魅力化事業に取り組んできました。

「最初は和気町の課題を解決するぞと意気込んだのですが、どこにいても自分のコミュニティーで自分らしく力を発揮できる人を増やすことが、結果的に地域を元気にする。そんな思いで、自分の未来や社会を自分たちの手で変える力をつけることを目標に、『閑谷學』などに取り組んでいます」

僕が、活動をはじめた理由

指定50年を機に農村歌舞伎復活

文・忠政泰男　広野子ども歌舞伎教室

「地域の子ども達と一緒に事業をするなんて信じられない。嘘だろう?」と自分の声が聞こえる。

10代から50年近くも津山を離れ（口の悪い友人は「君は津山を棄てた」と言った）、津山の事はほとんど知らない状態の私が2019年から公民館長を始めたことが子ども歌舞伎の教室を始めたきっかけです。

知識としては知っていた国指定の重要有形民俗文化財「田熊の舞台」が2025年に指定50周年を迎えます。農村歌舞伎の舞台でありながら10年以上もの間上演されていない。「また回り舞台で歌舞伎が出来たらよいなぁ」という地域の方々の思いもあり、また、子どもの居場所づくりとして子ども歌舞伎を立ち上げれば、中断していた農村歌舞伎の復活継承ができる。幸い、公民館と広野小学校が隣り合わせになっており、公民館を挟んで地域との連携もスムーズ。連合町内会広野支部が中心になって記念事業実行委員会を立ち上げる時、子ども歌舞伎も含めてもらった。50周年を祝う式典当日は、「子ども歌舞伎」のために集まったのではないかと思うくらいに地域の方々が盛り上げ、支え、力になってくださいました。津山市や津山市教育委員会の協力で、隣町奈義町の横仙歌舞伎との繋がりが出来、歌舞伎の指導を受けられるようになりました。

今後は、この子ども歌舞伎を継続し、学校や地域と協力しながら地域の芸能文化を復活継承していくことを目指しています。他地域とも連携し拡大できれば更にうれしい。

広野子ども歌舞伎教室

農村歌舞伎及び地域芸能の伝統文化を地域の子ども達に継承し、子ども達が農村歌舞伎や地域の芸能を学ぶことを通じて地域の歴史・文化活動を学び、いろいろな体験学習を安心して行える子ども達の居場所をつくる。

指定50周年記念事業での子ども歌舞伎の公演の様子

稽古の様子

私が、活動をはじめた理由

「客席がおもしろい」と各地から表現者集まる

文・スミカオリ
小さい劇作家フェス実行委員会 代表

「岡山劇作家会」劇作家の河合穂高さん、角ひろみさんとの出会いが、最初のきっかけです。この会は劇作の探究や対話を目的にお二人が小さく始めた会で、情熱と実力の勢いと切実な問題意識が活動の柱です。7人参加の戯曲勉強会から始まり、岡山芸術創造劇場に協力いただき、来年2月にハレノワの小ホールでフェスを予定しています。

昨年10月の長屋での「ゆっくりふくらむ劇作家フェス」、今年1月のハレノワでの「小さい劇作家フェス」と続く中、「劇作家」をフックにいろんな人に出会いました。この人たちは人の話をかなり真剣に聞き、人と違うことを言うのが得意で、面白い人たちです。特に若い人たちの、面白いことをやりたいというちょっと異常な情熱みたいなもの、さらに企画や制作の態勢づくりに及ぶ視野の広さに驚きました。丁寧に誠実に独自の形でやっている面白がりの人たちが、戯曲と劇作家が主役のフェスに集って、掘り甲斐のある戯曲をゴリゴリ掘り深める場が今度もつづいていくと、観客席にも他では得られない豊かな創造が増えるにちがいない、というのが主な活動の理由です。

公演は本気の人たちが練りに練って表現を厳選する上に、戯曲自体は文字だけなので、読むだけでは私にはほとんどわかりません。が、何度見ても新たな気づきがあって何度も感動できるのがホンモノだとすると、作品を味わうために何度も足を運ぶ、見るのがうまい観客が増えた将来、「岡山の客席はおもしろい」と各地の表現者が集まってくるんじゃないか……と妄想しています。

小さい劇作家フェス実行委員会

劇作家が少ない岡山で、劇作家のひろがりと観客との出会い、質の高い戯曲にふれる機会としての活動を企画する。戯曲を軸に作家自身が構成するリーディング公演や対話、見巧者を研究する場の創造に挑戦する。

長屋での「ゆっくりふくらむ劇作家フェス」の様子

ハレノワでの「小さい劇作家フェス」の様子

岡山スケッチ vo.1

原風景と原体験

文　山田　哲弘

風に揺れるタンポポの花の上に、一匹のテントウムシを見つけました。テントウムシは、タンポポの花や茎の上を、一生懸命足を動かして移動していました。その姿を眺めていると、子どもの頃、「なぜこんなにたくさんある足を速く動かせるのだろう」という疑問を持ちながら観察していたことを思い出しました。このタンポポとテントウムシの姿は、今でも私の心にある原風景のひとつといえるでしょう。

「原風景」とは、「原体験から生ずる様々なイメージのうち、風景の形をとっているもの」と定義されています。「兎追ひし彼の山　小鮒釣りし彼の川」で有名な唱歌「故郷」をその風景としてイメージする人が多いのではないでしょうか。私の原風景も、この歌と同じで幼少の頃からの遊び場だった岡山城や後楽園、西川緑道公園などで、身近な自然と昆虫や鳥などの生きものとの出合いが基本となっているようです。

原風景のベースとなるものが「原体験」です。教育学的には、「生物やその他の自然物、あるいはそれらによって醸成される自然現象を触覚・嗅覚・味覚の基本感覚を伴う視覚・聴覚の五官（五感）で知覚したもので、その後の事物事象の認識に影響を及ぼす体験」と定義されています。

原体験は質だけでなく量も重要です。自然の中で五感をフルに使って物事を感じ、集中し、それを頭で吸収する時間は、将来の「考える力」、「やりとげる力」、「ひらめき」などの能力につながっていくと考えられています。

近年ではこの原体験の重要性が注目されています。ノーベル賞を受賞した日本の科学者（福井謙一先生、白川英樹先生、野依良治先生）も幼少期に充実した原体験があったことが知られています。特に福井先生は「自然との生の触れ合いが科学的な直観を培った」と語っています。

原体験は豊かな自然の中でしか経験できないものなのでしょうか。いいえ。私は身近な自然でも十分できると思っています。

例えば家の近くにある公園。そこにはケヤキやクスノキなどの樹木が植えられているはずです。木々の姿を眺め、落ちている葉っぱに触れたり、においを嗅いだり、樹皮に潜んでいる虫を虫眼鏡で発見したり。大切なのは身近な公園でも「うわ～！すごいな」とワクワク・ドキドキ、心が動くポイントを自分で発見することが重要なのです。

さらに、原体験を共有する人の存在も重要です。例えば子どもがカエルを捕まえてきたとします。それを保護者が「きゃ～、捨てなさい」などと反応してしまうと、その体験はマイナスに進んでしまうでしょう。たとえ苦手な生きものであってもグッと堪えて、最高の笑顔で「かわいいね」とか「よく見つけてきたね」と褒めてあげてください。私の記憶では、持ち帰った生きものを両親は優しい笑顔で迎えてくれていたはず。

子どもの目を見て「どこにいたの？」と質問してみてください。子どもは最高の笑顔で「こっちだよ！」と、その場所までしっかりガイドしてくれるはずです。ぜひ、そこに足を運んでください。なぜならそこには子どもにとってかけがえのない原風景・原体験が存在しているからです。子どもの目を通してその世界を見つめ、新たな発見や感動を味わえることをお約束します。そして自然の美しさ、素晴らしさを感じる心は、ひとつしかない地球を大切にする心につながっていると、私は心から信じています。

山田　哲弘（やまだ　てつひろ）
岡山の自然を愛する53歳。1994年、公益財団法人岡山県環境保全事業団に入団後、県内の野生動植物調査や県版野生生物目録・レッドデータブック作成に携わる。2023年5月、イオンモール岡山6階にオープンした環境学習プラザ「アスエコ」所長に就任。展示やイベント、講演活動を通して、環境問題や地球の大切さを伝えている。

シリーズ Face

取材・文　森分 志学

優しい世界って一体なんでしょうか。

アフリカンプリントの布を使ったファッションブランド・jam tun（ジャム タン）。jam tunを直訳すると「平和しかない」ですが、「おはよう」や「こんにちは」、「家族や仕事の調子はどう？」などの返答として使われている現地プラール語の挨拶だそう。ジャムタンを通して、遠い世界を近づける田賀さんの活動に対する姿勢について、お話を伺いました。

遠く離れた場所でも、ジャムタンを通して私たちはつながっている。

田賀 朋子さん

子どもの頃から国際協力に関心があったと話す田賀さん。マンチェスター大学大学院修士課程で国際開発について学んだ後、青年海外協力隊に応募します。コミュニティ開発をミッションにセネガルに派遣され、住民の生活改善のために活動。村の仕立て屋に縫製を協力してもらい、廃棄される布とビニール素材で防水仕様のトートバッグをつくると、これが村の人に大好評でした。一方で、国際協力機関の支援が本当に必要な人たちに届いていない現実も目の当たりにしました。

協力隊任期を満了した後も、そのモヤモヤは残っていたそう。一方で、赴任したシンチューマレム村への愛着もまた、帰国後消えていませんでした。

個人と個人のつながりを目指したいと考えた田賀さんは、現地の仕立て屋・クイエと連絡をとり、アフリカンプリントの縫製品の生産・販売を始め、ジャムタンを創業します。

ジャムタンは、村の仕立て屋が縫製した服やバッグなどを、適正価格で日本で販売するビジネスモデルです。現地の生産態勢は見習いの青年たちを含む20人ほどで、販売は主に岡山県内での出店形式。国際協力という看板ではなく、単純にかわいいものとして販売することを大切にする田賀さん。ネット販売もしていますが、お客さんと直接つながることのできる対面販売を重視しています。購入者には田賀さんが見てきた現地のことも伝えながら、「よかったら後日、服を着ている写真を送ってください」と勧め、お客さんの様子を現地の作り手たちにも伝えています。

写真は作り手のモチベーションになっていて、お客さんの顔も覚えているそう。支援するという一方通行ではなく、作り手とお客さんの相互のつながりを大切にされています。それは、国際協力としての支援のつながりではなく、私たちの日々の関係性のなかにシンチューマレム村の人たちも、ただ目の前にいるひとりの人として関係しているというつながり。私たちが普段、目の前の人に真摯に対応し、一生懸命に行為しているように、シンチューマレム村に向き合う田賀さんを媒介に、商品を購入したお客さんも村の人と向き合っている状態を田賀さんはイメージしています。こうした関係性の醸成から、現地に行きたいというお客さんが出てきました。実際に村に招待して5泊6日の滞在。作り手さんは喜び、日本に行きたくなったなど、新たな活力が芽生えました。渡航したお客さんもまた、日本と全く異なる文化のなかでかけがえのない経験をできたことに感謝されていました。ジャムタンを媒介に、お互いにいつか行ってみたいと思えるような関係性をつくり続ける先に、田賀さんの目指す「優しい世界」があるようです。

ジャムタンの活動は、田賀さんがシンチューマレム村を好きで、そこに住む人たちのことを好きで、この地域に還元したいという思いから始まっています。それは縫製業の雇用を生むだけにとどまらず、2022年には現地のサッカーチームの支援も始めました。ゆくゆくは職業訓練や識字教育の機会、図書館、今回のような旅行者の受け入れ態勢なども整えていきたいと話します。田賀さんのコミュニティ開発は協力隊時代からずっと地続きなのです。

jam tun代表
田賀 朋子
Taga Tomoko

矢掛町出身。香川大学法学部を卒業後、マンチェスター大学修士課程で貧困と開発を専攻し、各種開発手法などを学ぶ。卒業後に青年海外協力隊でセネガル共和国に赴任し、住民の生活改善を目的に2年間の活動を行い、2016年に帰国。セネガルの魅力を発信し、途上国との優しく楽しい新しい繋がり方を提案するブランド「jam tun」を立ち上げ、現地の仕立て屋と対等なパートナーシップでものづくりに取り組む。

NPO法人だっぴ 代表理事
森分 志学　Moriwake Shigaku

1990年、岡山県倉敷市生まれ。大学院生時代に、高校生と大人の対話プログラムを高校と連携してつくる。卒業後は、教育系の広告代理店に勤務して、高大接続の領域に関わる。2017年に岡山にUターンしてNPO法人だっぴに入職し、2020年より現職。県内20市町村50校以上の学校や自治体の学校教育・社会教育に携わる。

表紙の絵　岡山の玩具歴訪 vol.1

明治生まれの洋画家・中田政夫のデザイン郷土玩具

文　玩具工芸社

牛窓の唐子人形、茶屋町の鬼、うわはん人形、桃太郎でこ、備中神楽人形。

手のひらサイズのこれらの人形は『岡山のおもちゃ』(日本文教出版/1975)などでも紹介されていて、戦後岡山の郷土玩具（正確には創生玩具にあたる）として「紀美工芸社」により製作され、土産物として販売されていた。

「紀美工芸社」とは岡山の洋画家・中田政夫（1905-1980）の妻・キミコ（1917-2019）の名前をもじって名付けられた屋号で、政夫が考案した土人形をキミコとその娘たちが製作していた。

昭和31(1956)年に三木岡山県知事から蒜山の土産物を作りたいという依頼を受け、郷土玩具の大コレクターでもあった政夫が「うわはん人形（※）」を考案したのが始まりで、岡山市北区津倉町の自宅で各地の伝説と郷土芸能をテーマに玩具製作をしていた。これらの人形は、瓦粘土を石膏型に詰めて成形し、七輪を重ねた窯で長い時間ゆっくり焼成され、絵付けをして作られる。下地がしっとりと塗られたゆるやかなフォルムで、筆でちょんちょんと描かれたお顔は今見ても可愛らしい。

調査のきっかけは、2023年12月に入手した素敵なイラストレーションが描かれた『鯛惣』（岡山市北区田町にあった岡山の果物・珍味の店。現在は閉店）のパンフレットにあった「政」のサイン。中田政夫の「政」だったのだ。更に驚いたのは『岡山のおもちゃ』を読み直すと津倉町の住所（軸原の住む家から歩いて2分くらいの位置）が紀美工芸社の住所として掲載されていたことだ。近隣の方々に聞いてみると紹介の紹介でご遺族と会うことができ、中田政夫が春陽会所属の画家であったこと、政夫の交友関係、また「山珍」のロゴマーク、「三宅製菓本店」の備中神楽面最中などのパッケージなど数々の岡山になじみのあるデザインをされていることがわかった。それらは2024年3月に開催した「中田政夫のデザイン展」で紹介し、ZINEにまとめた。

玩具から始まった中田政夫の調査がこんなに広がるとは思っていなかった。

各地の伝統をテーマにすることの多い郷土玩具が岡山市の洋画家により作られていたのは、とても興味深い。「この土地の玩具を作って欲しい」という依頼、言われてみたい。そしてうわはん人形が製作され始めてから20年ほど経った当時の新聞記事には「歴史は浅いが、郷土玩具としては定着し始めた。」とあった。中田政夫の仕事は地域に溶け込んだものばかりで、ご遺族が所有する資料や周りの方々の話をたどるしかなかったが、その度にミラクルが起きて非常に楽しい調査だった。

玩具工芸社

「玩具」と「工芸」の間を発掘・探究・創作するユニット。メンバーは軸原ヨウスケ（COCHAE）と、久米土人形の復元や、なとも工作舎で玩具製作を行う長友真昭。

※うわはん人形…岡山県真庭市、蒜山地方に古くから伝わる盆踊り「大宮踊り」の姿を模した土人形。高さ3センチほどで踊りの様子を5個1組で表している。「うわはん」とは囃言葉で歓喜絶叫の声音だろうといわれている。

参考文献 『岡山のおもちゃ』(日本文教出版「岡山文庫」1975)

編集後記

◆新年度が始まりました。通勤途中、後ろから見るとランドセルが歩いているような新1年生が、「おはようございます！」と大きな声をかけてくれ、元気をもらっています。財団事務局も新しい職員が増え、フレッシュな風が吹き込んでいます。◆「ふえき」をお読みの皆さまにおかれましても、所属団体・組織等に何らかの変化が生じているかと思います。当財団ではベネッセ上場廃止に伴い、財団運営の収益構造が大きく変化します。今年度はそうしたことへの対応をはじめ、2026年に設立40周年を迎えるにあたっての準備・仕込みの年度と位置付けています。◆さて、この助成でスタートさせた活動を含め、今年度の教育文化活動助成の108件の助成先が決定しまして、今号でご紹介させていただきました。応募件数が増えたうえに、申請活動の質は高くなり、審査委員の皆さまの頭を悩ませていました。◆助成先の皆さまは、財団と一緒に岡山をより元気にしていくパートナーです。一緒に頑張ってまいりましょう！（S）

機関誌「ふえき」
読者アンケート
ご協力ください。

▼アクセスは
こちらから

人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団
FUKUTAKE EDUCATION AND CULTURE FOUNDATION

〒700-0806 岡山県岡山市北区広瀬町1番5号 株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL 086-221-5254　FAX 086-232-3190　URL https://www.fukutake.or.jp/
E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp

福武教育文化振興財団ウェブサイト
コミュニケーション・マガジン and F｜アンドエフ
教育文化活動助成 成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 不易　vol.84　2024.5.25

編集・発行　公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作　株式会社吉備人
デザイン　久延 フミカ（ヒラガナ企画合同会社）
表紙画　タケシマ レイコ
印刷　研精堂印刷株式会社